

平成17年9月27日

ハンセン病違憲国家賠償訴訟全国原告団協議会  
全国ハンセン病療養所入所者協議会  
ハンセン病違憲国家賠償訴訟全国弁護団連絡会 殿

笛吹市春日居郷土館・小川正子記念館

館長 末利光



公開質問書にお答え申し上げます。

何度も精読致しました。そして歴史認識から始まって今日の状況確認に至るまで。また、私自身の人生哲学に対するご質問までと「多岐にわたってご質問をさせていただきました」と、この質問書も自らお認めのように、その一つをとっても極めて奥が深く、また拡大であり過ぎます。

こんな場合の常として文章を短くすれば意が伝わらず、考え方の違う立場にたつ場合などはかえってその溝を深くしてしまうことがあることを、皆様方も経験なさったことがあるかと存じます。また、個々別々の質問も、よくよく観察してみれば樹木のように根は一つで、その根をたどってそれにお答えすることが、樹木全体に行きわたる答えになると考え、再度、質問書を精読しました。その結果このご質問の根幹は2頁④の「差別、偏見をなくし、国民の理解を得るためには、このような場合、どうしたらいいとお考えなのか」という一点にあると考えました。

そして質問書をいただいてから改めて考え、何度か拙文もしたためましたが、これもまた大変な作業でした。同種のテーマについては何回か講演をしたこともあります。その時、その時点での原稿資料であって、そのものずばりのものではありません。また同じテーマで他の専門家の方々が、著作物をかなり出版されていると思いますが、私の場合は、その実践こそすべてと考えています。そう考えてみた時に本年五月十八日、長島からいらっしゃった仏教信徒各派代表多数の皆様をどうお迎えしたかをお伝えすることが、極めて具体的であり、その人達が私達の歓迎をどう受けとめてくださったかを、生のままお伝えすることが、時間の経った原稿をお送りするよりも遥かに有効であり、かつ正確であると考えて、JLMの原稿をそのままお送り申し上げ、今回の質問書に代えさせていただいた次第です。



私自身は学生時代からボランティアに強い関心を持ち、NHK在職時代には全国キャンペーン「フィリピンの地方病とたたかう七百万募金」（山梨県と同じ地方病で日本住血吸虫症といいます）で九千万円余の浄財を集め、特効薬プラチカントルに代えて絶滅運動に効果を上げて、仲間のもう一人とともに大統領官邸に招かれてお礼を言われました。その後ハンセン病で苦しむ途上国の人々に関心を寄せ、小さな運動にも参加しました。それらが全てご縁となって「笛吹市春日居郷土館・小川正子記念館」館長に招かれた次第です。また、小川正子女史の尠大な日記を十年がかりで整理するうちに、患者たちの交流を通して正子を取りまく実に多くの人たち（貞明皇后をはじめ、医師、看護師、事務職員そして外国人たち）のやさしい援護があったことに気付きました。それがこの本になったのです。また、入所者たちが病苦を乗り越えて行った幾多の感動の物語も沢山取材しました。教わることばかりでした。そしてこの本を読んでもくださった方々、特にハンセン病を取りまく多くの病院関係者、元職員であった人たち、一般の方々に至るまで、これも沢山の激励の電話、ファックス、戴いたお手紙などの数はすごい量になります。中にはお電話でいちいち涙しながら語られる方もありました。

そしてその中から特に感動的だったものの一つに、「あせび会（稀少難病者の会）」会長の佐藤エミ子さんのお手紙がありました。

ハンセン病患者の皆さまがかつて味わってこられた大変なご苦勞を、いまもって味わっていらっしゃる人たちのあることを知って、私は驚きで言葉もでませんでした。そしてその方々の親となって社会の無理解とたたかっていらっしゃる佐藤さんの姿に泣きました。私の余命をかけてどうこれにご協力申し上げることが出来るか。折を見て早い時点でお訪ね申し上げたいと思った次第です。佐藤さんのお手紙は、特に「差別」と「偏見」を考へるご質問に欠くことの出来ない解答資料としてお届け申し上げます。

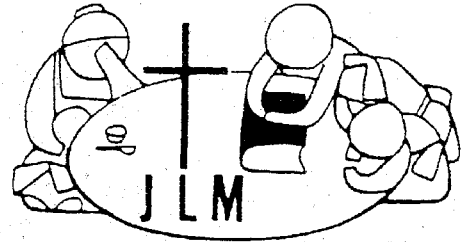
その他のことにつきましては、あまたあるご意見の一つと深く心にとめ、次第にうっとうしく感じる世の中にあつて、「言論の自由」の火をさまざまの立場で守り通してこそ民主主義の日本のあるべき姿と感じ、私もその中の一人として恥じない自分に成長していきたいと存じたことでした。

以上をもってこの公開質問状に対する解答とさせていただきます。

そのほか同封資料として、新聞資料3部。

お詫び

本JLM誌の発行がたいへん遅延しておりますことを、心からお詫び申し上げます。只今、挽回するべく努めておりますので、もう少しお時間をいただけますようお願いいたします。本号は2・3月号ですが、実質7月10日発行です。



社団法人  
Japan Leprosy Mission

2・3月号  
2005

解答資料(一)

愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。

(聖書 コロサイの信徒への手紙)

私のハンセン病に対する差別偏見をなくす啓蒙活動の一端

「長島愛生園・真宗同朋会のみなさまへ」

小川正子記念館 館長 末利光  
笛吹市春日居郷土館

拝復

先日(五月一七〜一八日)は小川正子先生の墓参のため、瀬戸内の長島から山国甲州まで直線距離で四〇〇キロ、八時間もの長旅にもかかわらずお出掛けくださいます。本当にありがとうございます。誰よりも訪ねて欲しかった遠来のお客さま。それも死の直前までも正子が夢に描いていた長島から、大型観光バスで一八人もの入園者のみなさんが墓参に来てくださるなんて、誰が想像できたでしょう。館長の私は、正子の寝姿のデスマスクの写真を抱いて、みなさんと一緒に記念写真におさまりました。

「待っていて」「早く、早く」みんなであつりました。  
正子の終焉の「療養小屋」(正子自身がそう呼んだ病室)の前でパチリ。そして正子の眠る仏念寺の本堂の前でもう一度パチリ。まるで修学旅行の光景でしたね。われわれの前にはテレビカメラや新聞各社のカメラの砲列が出来て、写真が終るのを待ちかねたようにインタビュー。

「小川さんはどんな人でしたか」  
「こわかったけどやさしい先生でした。あの先生の先生。私もあいう先生になりたいと思つたわ」  
唯一、正子を知る中村キミコさんは(七七歳)はもてもてでした。  
「きのうから私たち、瀬戸内のスター」  
そう言つてキャッキヤと笑つている女の人たち。盛んにメモをとる男性。  
「小川さんの生家はどこですか」  
「あの大きな樹が生えている森のようなところが見えますね。あのお宅です」  
生家を遠望し、墓参を済ませ、正子のふる里の山、兜山を仰いでみんな満足そうでした。  
墓参を済ませてバスに乗れば一路長島へ。また八時間の長旅のはじまりです。私は一人の女性に聞きました。  
「こんなにも長旅をしてきてくださって、来られた甲斐がありましたか」  
館長の歓迎準備の成果が決まる一瞬でした。



愛生真宗同朋会春日居郷土館来館記念

女性はにっこり笑って

「もちろん。たのしかったわ」と答えられた。

「何が一番」

と、言ってしまったから愚問だと思ったがもう遅い。

「全部」

私は笑い出してしまった。

「はじめからよ。歓迎会場に入るとすぐに拍手をして迎えてくださるなんて想像もしなかった。あんなに沢山の人がいるなんて」「拍手も何回か練習したんです。もう一回やろうと思ったらみなさんが入って来ちゃったんでそのまま本番になったんです」また言わなくてもいいことを言ってしまった。

荻野市長の歓迎のあいさつ。「小川正子の精神は合併しても新しい市のシンボルです。」と言えば、小川正子記念館の生みの親、前町長（合併前）の金井豊明氏の正子に対する敬愛のことば。福祉協議会長のあいさつ。地元詩吟会々員の「小川正子女子を悼む」光田健輔の漢詩と正子の「夫と妻が…」の歌が朗詠された。そして障害者たちの寸劇。せつかく溜めた金を悪いバーに誘われて身ぐるみはがされてしまうというそれだけの芝居だが、どぎつい化粧の女たちが何人も登場し、髪を落とすしながらの「巧まざるの名演技」に爆笑。そして極めつけは石和温泉「小紋」の女将が三味線を弾きながら「武田節」でしめくくった。全員がボランティアだった。

お礼のあいさつに立った真宗同朋会の多田芳輔会長が言われた。

「光田健輔先生の墓参もしたが、かねてか

ら小川正子先生の墓参もしたいと思っていた。それがこの館長さんの書いた「ハンセン病報道は真実を伝え得たか」を読んで小川先生の墓参を急がせることになった。直接小川先生を知っている人は極めて少数だが、私たちが世話になった方々に感謝の誠を奉げるのは当然です。予想もしなかった多くの人たちの歓迎を受けていまは感激しています」

司会をしていた私は思わず抱きつきました。多田会長は兄か父の様な威厳を持って、しっかりと私を受けとめてくれました。

私はとても自分の書いた『ハンセン病報道は真実を伝え得たか』の出版で、その反響が全く気にならなかったといったら嘘になるだろう。一部の人たちは、殊に自治会幹部の人たちがどう思うだろうかという想像はつく。しかし、あそこまで小川正子を批判し、「差別」と「人権」ばかりを楯に言いたい放題。小川正子をはじめ多くの奉仕者たちの歴史認識まで変えられてはたまらない。家族の大反対を押し切って、まるで家出同然の決意を秘めて郷里を出て行った純粋さまでを一刀の元に斬り捨てる。こんなことがあっていいのだろうか。これは小川正子に限ったことではない。ハンセン病と闘った全ての医療従事者の「あの言わぬ我慢」の上に今日のハンセン病医療があることを誰も気付いて上げようとする

ことが不思議でした。そして何よりもハンセ

子さんの「現成は「善多已念」ト川三三...



ことが不思議でした。そして何よりもハンセン病に限ってみれば、これまでの日本のメディアはあまりにも真実から遠い立場に立ち過ぎていた嫌いがありました。

私の本が世に出ると同時に沢山の激励と感想が寄せられました。「こんな真実すぎる本が出されたなんて」とか「良くぞここまでと思いつつ泣きながら読んだ」「溜飲が下がった」とする、おそらくは直接ハンセン病医療にたずさわると思われる人たちの積もりつまった気持ち。「そんなことがあったのか。知らなかった」「初めて知った」「よくぞ温泉の味方に立ってくれた」「あれだけ一部患者のわがままを放置してきた厚生行政とは何だったのか。」と一般の意見を上げれば際限もないのです。中には「村社会の日本にあつてよくぞあれだけ書けたと思う。しっかりとした立場に立つて意見を言うって行く本が出てきたことは日本にとって嬉しいことです」という外国人の投書まで。本屋に出ないで再版が出るなどと、誰が想像できたでしょうか。

しかし、なんといろても一番の喜びは今回の長島からの墓参団でした。これだけの人たちが大型バスで来てくださると思っても寄らなかつただけに、私を取り巻く周囲の人たちも驚きました。これは是非最大の歓迎をしなければと、話が一挙に盛り上がりました。正

子さんのご親戚は「墓参記念 小川正子」と書いたタオルを沢山用意して、お一人おひとりに深い感謝を述べたのでした。また、ボランティアの中には、自宅でも未だ食べていない桃の早取りやブドウなどで遠来の客を慰めました。

そのボランティアの一人がふと漏らしたひと言。「なーんだ。普通の人じゃない」と言ったのを聞いた私の友人が「あのひと言のためにわれわれの長い運動があつたのだ。さすが



障害者グループの寸劇

正子さんの郷里ですね」と、すっかり感心していました。

しかし、感心したのは他にもありました。私は大型の墓参団が来るという情報が入ってから、ひそかに準備していたことがあります。それは百に一つも「黒川温泉事件」の二の舞になつてはならない。彼等を悲しませてはいけないということでした。スタンバイの宿泊施設を二重三重に用意して、最後は温泉設備の完備した役場の福祉施設に蒲団を集めて来て寝ていただく手筈も整えました。市役所職員たちも喜んで協力する体制づくりが出来ました。墓参団の乗って来る中鉄バスにも何度も確認しました。その度に「どうしてですか」という答がバス会社の担当者から返ってくるのです。それでも再三状況を聞いて見ると、遂にバス会社の女性社員がこう言ったのです。「私たちにはあの方がたは大切なお客さまです。黒川温泉事件の10年も前からのお得意さんです。いままで一度もそんなこともなく全国各地を訪ねてきました。ですから何んでああなるのだろうかと、黒川温泉事件の時は不思議な事件を見るようにテレビを眺めていました。ガイドも運転手も、まるで専属のように可愛がっていただいていますから、まず、そのご心配は不要かと思えます。と、見事な返事でした。そしてこちらの石利温

泉も普段の通り。とりわけ中居さんたちは一生懸命だったといえます。しかし、それにはバス会社の職員が初めての土地への行程を全て調査しながら、食事処やホテルの下調べを完璧なまでに整えていたことも忘れてはならないのです。何日か前に「小川正子記念館」の玄関まで来ていたともいいます。

お役所の仕事は権威でどこまでもやろうとするから失敗する。これではまるで事件を起すためにやったようなもの。こういうことは民間にまかせて置けばいいのです。墓参団が帰った後で、私は温泉ホテルの窓口の女性と会話をしました。

「どう彼等は」

「マナーのいいお客さんたちでした」

「売店の売り上げはどうでした」

私は彼等が旅へ出ると、旅行に出られない多くの患者たち一人ひとりにお土産を買って行って慰めていることを知っていたからです。「いつもの三倍位売れましたか」

とさらに質問すると、にっこり笑って両手を広げました。10倍ですというのです。いいお客さまで、元患者も、バス会社も、ホテルも、みんなが喜んでいるのです。

歓迎会の終った一日目の夜のホテルに私はご招待をいただいて御馳走になりました。上座に多田会長と並び酒をいただきました。こ

んな美味しい酒は久しぶりでした。

「館長。こつちへ来ないか」

一人の男性が私を自分の席に呼びました。

「館長の本は三日で読んでしまった。よかったよ。これからも真実を書いてくれ。きつと応援するよ」私にとつてこれ以上の喜びはありません。正しいことに体を張って応援してくれれば元患者たちがこんなに沢山居ることの不思議さでした。他人には言えない。それこそ差別や偏見を受け、誰もが自殺を考えない人たちはいなかった筈。それら乗り越えてこの心境に達した人こそ、本当の思い遣りと労わりが生まれるのだと思いました。

私はみんなに言いました。

「ここは小川正子のふる里です。これからもいつでも来てください。私たちが正子の代りになってお世話しますから」と。

多田会長は翌日、私の要望に応じて次の様なことばを私の著書の裏に書いてくださいました。

懐かしい故郷発見しました。

長島愛生園 多田 芳輔

墓参を済ませた一人ひとりが赤い大型バスに乗り込んで行きました。私にはそれが十八人の「笠地蔵」が大仕事を終えて帰って行くように見えました。胸が一杯になりました。

高齢の元患者が多いことから、これだけの

規模での墓参は最初で最後になるのではないだろうか。しかし正子が一番来てほしい人たちの墓参で正子も満足していることと思う。

翌日の『朝日新聞』が私の談話をそのまま伝えてくれました。ローカルのジャーナリズムは全てトップニュースとして一日何回も報じていました。

「お顔も、不自由な手や足も撮っていいですか」

「ああ。何んでも撮ってくれ」

若いニュース記者やテレビのカメラマンたちは不自由な線香を持ち、正子の墓石をなでる墓参団の全てを報じました。ここには小川正子を通して全ての垣が取り払われました。

私は正子のデスマスクの写真を多田会長に持ってもらって、仏念寺の本堂での「記念写真」を撮って貰いました。町の人たちも、ニュースを見た山梨県民も「よかった」「よかった」と言ってくれました。爽やかな旋風をふりまいて、墓参団の赤いバスは正子のふる里を去って行きました。

さて、それから数日後、墓参団の人たちからお礼の手紙や葉書が沢山届きました。その中の一つをそのまま紹介させていただいて私から関係のみなさま全てにお礼のことばとさせていただきます。

平成十七年六月

敬具



座に多田会長と並び酒をいただきました。こ

〈お礼状〉

### 長島から春日居へ

和公梵字

高年齢の元患者が多いことから、これだけの  
平成十七年六月

冠省、新緑から萬緑への好季節

この度は、小川正子先生記念館の見学と、お墓参りに当たりたいへんお世話様になりました。お陰様で無事に予定通り十八日の午後六時四十分頃に帰島できました。途中少し雨に逢いましたが、御地に於ける諸行事と島での車の乗り降り、途中の食事時、トイレ休憩には雨に逢うことなくたいへん恵まれました。

これも小川正子先生はじめ、春日居町の皆々様の思いが御守り下さったのだと語ったことでございます。

あんなに多くの皆々様にあたたかくお迎えいただき真心籠るおもてなしに井の中ならぬ島の蛙は、感謝の言葉を知りませんでした。

春日居前会長の熱い思い、小川正子先生の姪御さんのお話に胸をこみあげてくるものがありました。劇、短歌朗詠、武田節と民謡と温かい催しものに異郷に在るを忘れ、園の福祉会館で慰問を受けて居るような安らぎをおぼえて楽しんでいました。

石和温泉の甲斐路ホテルの従業員の皆様の細かいお心遣い、お茶の湯は熱いですよと、



兔山をのぞむ小川先生のお墓へ詣でる

鍋物は、皿にとつてくれて熱いから気をつけてと、さりげないお心遣い、薬を呑まれる方には水ですよと、あたり前の事をあたり前に行なって下さることが有難いことなのです。あたり前の事があたり前に行なわれないのが現代の惨状だと思います。夕食の会食の席を眺めて黒川事件を思い、人権を楯に破壊に追

い込んだ熊本県と、心情ゆたかに啓発をして下さった山梨県の福祉行政の相違をしみじみ感じました。

十八日は限られた時間内を、手際よく進行して下さった先生の事捌きに感服いたしました。小川先生の療養なさって居られたお住居は、昭和十五年から十七年までの「愛生」に短歌を寄せられています。この地、このお部屋で四囲の自然を眺め、憶いを長島に馳せて作歌なさったのかと思ひ、時を忘れて足で歩るき、草木に触れて作句できたらと、適わぬ夢を追っていました。また玉木愛子の写真に逢っておどろきました。俳句の先輩であり「この命ある限り」の出版にはいささか関係したので感動も一入でした。

仏念寺山内のお墓前に於ける追弔法要に逢わしていただけたこと、私は小川正子先生を直接存じあげてはおりませんが、俳句会で寄せ書をしていたこと、追悼句を詠み句会をしたことですが、小島の春を読み映画を観ていますので、私の小川正子像があります。浜大根がお好きだったとおききしていますので、浜大根の季節には多く浜大根を詠みます。

小川家の皆様をはじめ県の係官、市の関係団体の皆様、その他多くの皆様方にお世話になりました。その上、おみやげまでいただき



きました。お一人お一人にお礼状を差し上げべきが本意であります。意のままになりません。先生からどうぞよろしくお伝え下さいますようお願い申し上げます。

「一方を證すれば一方は冥し」です。あまりにも一方的な片寄ったハンセン病報道に、声なき真実の声をあげねばと、光田先生のお墓参りからはじめた行動でした。先生の御本は大きな力となっております。

「そうだそうだ」とうなづき乍ら、一ツ気に読みましたと、多くの方から電話がありました。(所謂、直接看護や事務に当たった方、救済事業に理解協力して下さった方々からです)お寺関係にも差しあげています。大地に水の浸むように、時をかけてわかっていただけると信じています。

「小人は己ある事を知って人ある事を知らず」(熊沢蕃山)では困ります。生かされて生きてあるいのちに感謝して反省し、日々の生活の中に己がつとめをつとめて参りたいと存じます。今後ともよろしくお導き下さいますようお願い申し上げます。

島にお越しの日をお待ちいたします。  
乱筆駄文にてご厚礼迄  
末筆乍らご尊体ご自愛の上益々ご活躍は  
されますよう祈念いたします。

合掌

平成十七年五月二十一日

末利光先生

御机下

和公梵字

〈追記〉

この礼状はご本人の了解のもとにお名前まで公表させていただきました。

また石和温泉の「ホテル甲斐路」の実名も、「どうぞ。どうぞ」ということなので掲載させていただきます。

「私たちはお金をいただいております。お金をいただければみんな大切なお客さんでしょう。心からくつろいでいただければ二度と来てくれませんかからね」これが社長さんの全てでした。

ここにはもうハンセン病などないのです。熊本県は大きな損をしましたね。(末)

あしがき



▽ 愛生園の中に真宗同朋会があります。一五〇名をこえる最大の宗教の会です。そこから末利光先生の本を読んで下さり、小川正子先生への一部の人々の評

《発行所》156-0057 東京都世田谷区上北沢3-8-19

社団法人 Japan Leprosy Mission (JLM)

理事長 嶋崎 紀代子

編集発行責任者 伊藤 秀朗

《事務室》156-0057 世田谷区上北沢3-8-14松沢教会

電話(教会) (03)3304-5900 FAX(03)3303-4543

(伊藤自宅) (03)3302-3007

※振替・00150-1-71219 JLM

※銀行・みずほ銀行新宿支店 普通預金216517

頒価 1部 100円・年額 1,000円

▽ 療園にはこのような人生の師父母とも言う方が、過半おられることを覚えて下さい。(伊)

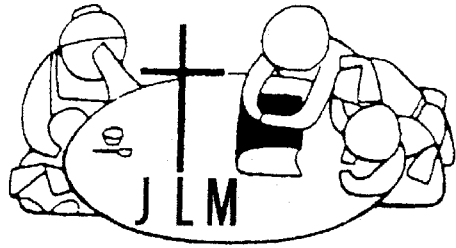
▽ 療園には、一八名の方が山梨県笛吹市春日居町まで、八時間もかけていらして下さいました。記念館を見学し、墓参りをされ、人々との交流を深めていかれました。

▽ 小川正子先生が一番あいたかった方々を招かれ、最もお喜ばれたことと存じます。

▽ お出でいただいた方々の明るくさわやかで暖かいお人柄、高い見識、崇高な人格は、県・市のご関係の方、ボランティアの方、ホテルの方などに深い感銘をおいて帰られました。



— 目 次 —	
	頁
小川正子記念館の見学を終えて …	1
小川正子先生が招く ……………	3
忘れられない六月十九日 ……………	8



社 団 法 人 Japan Leprosy Mission	5 月 号 2 0 0 5
----------------------------------	------------------

わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に  
発揮されるのだ。

(聖書 コリントの信徒への手紙Ⅱ)

今度出版された、末利光先生の「ハンセン病報道は、真実を伝え得たか」を読了して、私は感動しました。そして昭和十五年の映画「小島の春」の作者が小川正子先生でした。この映画は私が十五歳の時でした。私自身がハンセン病に罹るとは夢にも思ったことはありませんでした。六年経過した昭和二十一年一月私が発病したのです。当時は不治の病いで治る見込みのない時代です。私は昭和十五年に観た映画が脳裏より離れることが出来ず、もう一度「小島の春」を観たいと思いついた矢先、友人よりビデオがあることを知り、六十五年ぶりに再度「小島の春」を観ました。六十五年前に観た同一の映画を観て、一層小川先生に対する思いが強まりました。そして末利先生の御本を通じて、小川先生の故郷見学を実施することになり、友人知人にこの計画をお伝えしたら十九名の方がご参加下さることになりました。実施後二ヶ月が経過しましたがあの時の感動は忘れることができません。



インタビュー中の多田会長

今後の療養生活の糧になると参加者一同心より有難く感謝させて頂いております。

眞宗同朋会会長 多田芳輔

小川正子記念館の見学を終えて

解答資料 (二) 私の本に対する入所者たちの反響

(第三種郵便物)

末筆乍らご尊体ご自愛の上益々ご活躍遊ばされますよう祈念いたします。

合掌

あとがき

ります。一五〇名をこえる最大の宗教の会です。そこから末利光先生の本を読んで下さり、小川正子先生への一部の人々の評

《発行所》1 社団法人

《事務室》156-0 電話(教会)

(伊藤自)

※振替・0015

※銀行・みず

頒価





岡山から800km走って来た中鉄バス

国賠訴訟で勝訴となり、マスコミ関係の方や、各地より沢山の団体が愛生園を訪ねて下さる事は大変有難いことですが、その報道は一方的であり、心ある入園者は悲しい想いをしている事も事実です。私達が組織している眞宗同朋会にも、毎日の様に各団体がご来園下さっていて交流を深めています。心を開いて眞実を語ろうとしても、私達の誠意が伝わらず残念に思うこともあります。私達は命の限り眞実を伝える為に励みたいと思っています。

光田健輔先生を慕って愛生園に女医として献身下さった小川正子先生、そして私達患者の立場に立って、命をかけてご尽力下さった諸先生のご恩を忘れてはいけなないと、心に命じて生き抜きたいと思うばかりです。

光田先生は私達に人間として生れ、今、生かされていると言うことはその一人一人に有用があるのだと教えて下さいました。生れ難い人間に生れると言うことは、その人でなければ出来ないご用があるという事であり、人間生れた価値意識を窺見することだと教示下さいました。私自身もハンセン病に罹病し社会より離れた場所で生活することの、この上もない不幸と感じた時期もありましたが、現在では人間に生れさせて頂いた眞実の意義価値に目覚めることが実現し、無上の喜びを感じ得て日々暮らさせて頂いております。去る五月十七・十八日に実施させて頂いた小川正子記念会見学旅行は、私にとってはこの上もない喜びでした。そしてこの計画を実行するに当たり末先生・小川正子先生親戚ご一同様、笛吹市市長様、前春日居町町長様、多くのボランティアの皆様、本当に有難うございました。一度もお逢いしていない小川先生がこの旅を通して、一入親しくなりました。有難うございました。



挨拶する萩野笛吹市市長さん



みんな有名人

合掌

# 小川正子先生が招く

小川正子先生墓所・佛念寺

住職 藤谷 眞琴

「おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころごし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。(後略)。」これは「歎



正子先生の愛した兜山を望む墓所で挨拶する姪御さん

異抄」第二章の冒頭の一節です。

親鸞聖人歿後、その直弟子の唯円が書き残したものとされており、

親鸞聖人が関東(茨城県)におられた頃に直接仏法を聞いた唯円は、その後の異説に対して疑問を持ち、京都にお帰りになつておられた親鸞聖人の元まで、教えの確認の為に同友と共にはるばると、東国から上洛して、親鸞聖人の正意を聞いたのでした。

当時、上洛の旅は並大抵のものではありませんでした。留守中の家事のこと、家族のこと、経済的なこと、道中の身の危険等々一大決心を必要と

全より解れた場所でも生活することの、この上もない不幸と感じた時期もありましたが、現在では人間に生れさせて頂いた眞実の意義価



愛生眞宗同朋会佛念寺参拝記念写真



しました。交通手段・身の安全は保障されてはおりませんでした。京都での再会は、双方の感激大なるものがあつたことでしょう。そして、親鸞聖人の教えを再確認できたことの喜びも絶大なものがあつたことと推察できます。

このたび、二〇〇五年五月一七日一八日、岡山県の長島愛生園の真宗同朋の会の一行一九名の皆様は、山梨県の佛念寺へ念願の故小川正子先生の墓参を実現なさいました。永年にわたる悲願が実現したのであります。一行の中には、当時(昭和七年六月から



墓参 1

昭和一四年三月まで)直接医師小川先生から、懇切な診療と、手厚い看護と、愛情いっぱい接触を受けた方々も何人かおみえでした。ある時は医師としての、ある時は母親のような、或いは姉のような小川先生でした。その小川先生は過労のために結核に倒れやむなく郷里・山梨県春日居村(現在の笛吹市春日居町)桑戸の実家に戻って静養なさっておりましたが、二度と長島に赴くことあわず、昭和一八年(一九四五)四月二十九日不帰の客とされました。

一行の皆さんは五月一七日早朝長島を発ち、バスに揺られて片道九時間にも及ぶ長旅を終えて、笛吹市春日居町の福祉会館で歓迎会



墓参 2

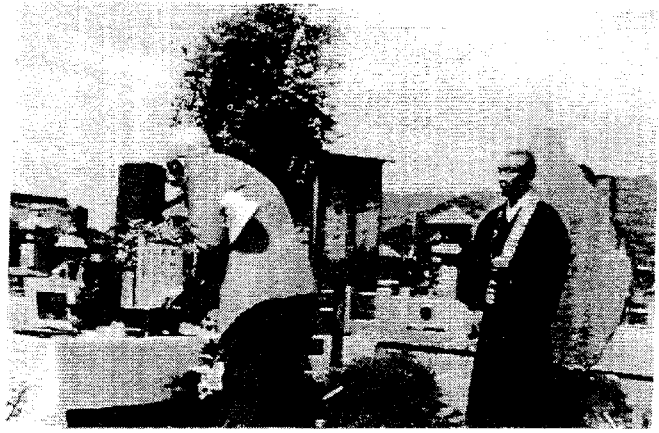
に臨みました。大勢の市民・関係者に迎えられました。庄巻は一行の団長多田芳輔さんと小川正子記念館末利光館長との感激と涙の再会・男の抱擁でした。翌日は記念館にて小川先生の遺品・着衣・聖書・お手紙・愛用の医学書・短歌・懐かしい写真などを感慨深げに食い入るように見入っておられました。先生が療養生活を送った建物を移築したお部屋に、膝をくずして座っておられる先生の実物大の人形を目の前にして感無量・落涙の皆様でした。



墓参 3

続いて訪れた佛念寺では、墓前に荘厳された祭壇の前で焼香をし、先生の墓石に額ずいてしばし身動きもせず、受けたご恩に対して感謝の念を新たにし、手を合わせ、墓石を抱くようにして、先生の背中をさするが如く何回も何回もさすっておられました。

小川先生没後六〇有余年経った今、病も癒えて、元気に生きていることを報告することが出来たのであります。私は皆様の心境を



墓参 4

拝察申し上げた次第です。

私は墓前で親鸞聖人御製の正信偈（しょうしんぎ）を読誦いたしました。真宗同朋の会の皆様はご本を見ることもなくご唱和してくださいました。

小川先生の墓石の背面には「生きて行く日に愛と正義の十字路に立たば必ず愛の道に就け」と刻まれております。死の間際まで小川先生が愛用していた聖書の扉に自筆で書かれた文章です。現在、地球上ではそれぞれが自国の正義を主張して戦争が続いております。真の正義とは何でしょうか。



墓参 5

今回の一行は歎異抄の唯円とは旅の上り下りは逆ではありませんが、私は皆様のお姿に接して唯円の心境に相い通じるものを感じ、その場で上記歎異抄の一節を思い起こしたことであります。

皆様は恩師に再会すべく遠路をも意に介さず、現在、生かされていることの報告に参加なさったのであります。その発意と実行に敬意を表するものであります。

帰途を急いでおられましたので長い時間お引止めすることもできず、充分なるおもしろも出来ず心残りです。皆様ご苦労さまでした。お疲れさまでした。

合掌

(二〇〇五年六月一日誌)



墓前で説明する末館長





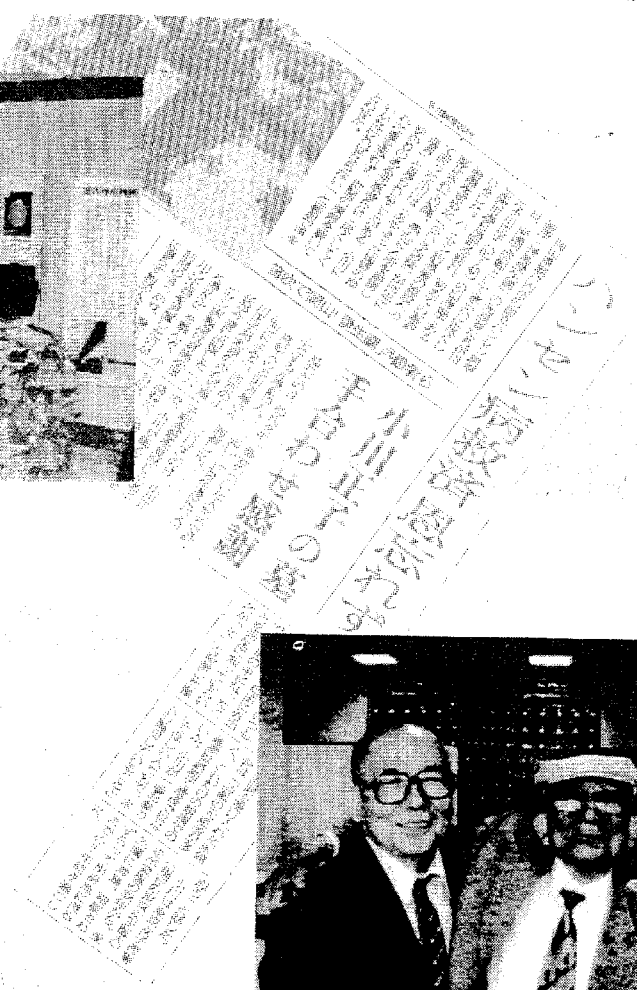
療養小屋をのぞく



愛生園の谷川秋夫さん、近藤宏一さんの展示の前で



記念館の展示を見る

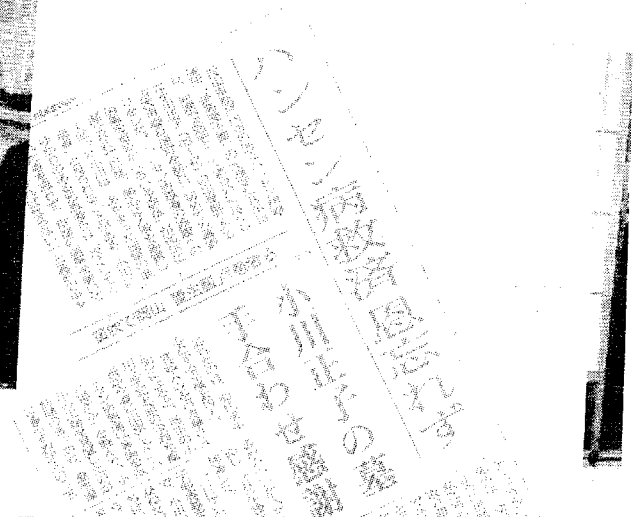


末館長と多田会長





皆様方と懇談する館長



歓迎会



石和温泉・小紋の女将は武田節で歓迎



障害者グループの寸劇





### 忘れられない六月十九日

藤田 三四郎

ふるさとの大洗海岸を妻と歩き続けた  
母なる海に守られて支えられて  
歎びも悲しみも優しく見守ってくれた海

私は妻と腕を組んで歩いてきた

妻は十二才の時にハンセン病と宣告され

療養所に収容されて六十六年間

偏見 差別に耐えながら

多くの療友 主に在る兄妹 仮孫たちと出会

って七十八才まで生かされ感謝です

昭和二十一年から私と夫唱婦随で

五十八年間前向きで歩いて来た

私が四十七年間自治会活動が出来たのも

「お前の影の支え 迷惑をかけて本当に申し

訳ない」と詫びた

足跡の記憶を波音が鮮明に語りかけてくる

私がベッドサイドで妻の手を強く握っている

と

妻は言葉にならない声で「お父さん本当にあ

りが……と……う」と

私は涙が瀧のように流れていた

心電図モニターの音が遠くに消えて行く  
妻は波音を枕に旅立ちの仕度

先生 看護師 知人に見守られ

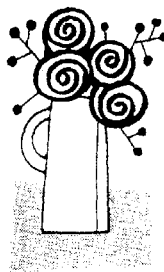
六月十九日午後三時三十八分に主のみもとに

召されました

聖歌四百三十番 主よみもとに近づかんを

口ずさんでいた

二〇〇四年六月十九日



### あとがき

▽ この五月号も八月末の発行になつてしまいました。

▽ 先々号(八一七号)で笛吹市

春日居町の小川正子先生の墓参

と記念館を訪問された、長島の

眞宗同朋会の多田芳輔会長からと、迎えて

下さった正子先生の墓所をまもられる佛

念寺の藤谷眞琴住職から玉稿をいただき

ました。

▽ 記念館の名カメラマンが写された写真の

ほんの一部を紹介いたしました。

▽ TV局のカメラが四台もはいり、全く普通

の取材と同じようにカメラがまわり、イ

ンタビューしてました。これは翌日山梨

版で放映されました。

▽ 人の誠と誠が交わる美しさを堪能させて

いただきました。そこにはハンセン病など

存在する余地はありませんでした。正子先

生の夢見られた姿を、正子先生自らの招き

で実現されました。

▽ 藤田さんの詩、じっくりご賞味下さい。

▽ 年毎に暑くなる都会の夏、まだまだお体

をおいといなされますように。

《発行所》156-0057 東京都世田谷区上北沢3-8-19

社団法人 Japan Leprosy Mission (JLM)

理事長 嶋崎 紀代子

編集発行責任者 伊藤 秀朗

《事務室》156-0057 世田谷区上北沢3-8-14松沢教会

電話(教会)(03)3304-5900 FAX(03)3303-4543

(伊藤自宅)(03)3302-3007

※振替・00150-1-71219 JLM

※銀行・みずほ銀行新宿支店 普通預金216517

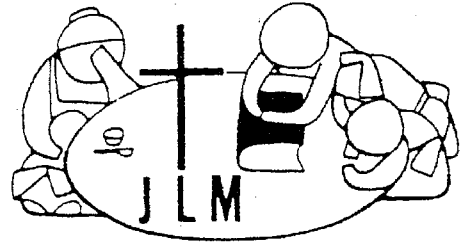
頒価 1部 100円・年額 1,000円







— 目 次 —	
	頁
モロカイ島に思うこと —「ハンセン病報道は真実を 伝え得たか」に寄せて—	1
ハンセン病報道は真実を 伝え得たか」を読んで	4



社 団 法 人  
Japan Leprosy Mission

1 月 号
2 0 0 5

愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。

(聖書 コロサイの信徒への手紙)

妻は言葉にならない声で「お父さん本当にあ  
りが……とう」と  
私は涙が溜のように流れていた

▽ 記念館の名カメラマンが写された写真の  
ほんの部を紹介いたしました。

《発行所》 社団法人  
《事務室》 電話 (教) (伊) 振替・銀行 頒

本年初めに出した末利光著「ハンセン病報道は真実を伝え得たか」は、好評をもつて迎えられ、初版は殆んど出てしまいました。この僅かな期間に多くの方々からご感想、ご批判等を頂戴しました。それらを通して私どももとても多くのことを学ばさせていただきました。順不同ですが遂次紹介させていただきます。

モロカイ島に思うこと

「ハンセン病報道は真実を伝え得たか」に寄せて

財団法人野口英世記念会副会長  
北里大学名誉教授 小柴 健

私は医師だ。医の道を志した中学生の頃には野口英世に憧れ、当時は未だ不治の病だったハンセン病の研究をしようと思ったこともあった。医学生になってからは光田健輔の名を知り、多磨全生園の見学実習にも行った。卒業して泌尿器科医になったが、一時赴任していた岩手医大の皮膚科学の教授(故人)がレプロシー(教授はそう言っていた)の専門家で、その分野の全国大会の会長も務められた。それを身近に見ていた私は、多少なりともこの病についての知識を持っていると思っていた。

しかし、本書でモロカイ島のことを知って、私はすっかり考え込んでしまった。これまで

の私にとってのモロカイ島は、あくまでも美しい南国の島だったからだ。私は米国での医学留学をハワイでのインターンから始めた。そのハワイでは毎年アロハウイクというお祭りがあった。1957年のことだったが、ホノルル市のクワキニ病院に赴任して早々の私は、同僚に誘われて、そのパレードを見にワイキキに行った。ハイライトはそれぞれの島を代表するフロートの行列だ。カーニバルさながらに車に引かれた大きな舞台の上でそれぞれ島の代表する若い女性のチームがバンド演奏に合わせて踊りながら次々と通り過ぎて行く。紺碧の空、南国の雲、それに椰子の木立をバックにして、どのフロートも輝く

解ける言葉に  
私の本に  
あせて全員の表の感じとさたらる差が、僕自身

ばかりに綺麗だった。その中でなぜかモロカイ島のもが私の脳裏には今もって強烈に焼きついているのだ。ハワイ特有の衣装を纏った踊り子たちの顔はみな晴れやかなスマイルにあふれ、若かった私にはただただ眩しかった。見物人達の歓声や拍手も一段と大きかった。

今の私がいささかショックを受けたのは、私がホノルルの病院で医師として2年間の研修を受けた間に、またその後専門研修を受けたロスアンゼルスでも、誰もモロカイ島のこととは話してくれなかったことだ。プロミンとそれにつながる新薬の開発から十年余が経ち、不治の病ではなくなったハンセン病者の収容施設があったモロカイ島のこと、ハワイの人たちにとってはすでに過去のことだったのだろうか、いやそんなはずはないだろう、おそらくはいろいろな人種の人たちが住み着いていたのだろうと思う。当時の米国は古きよき時代の絶頂にあり、国は富み、人々の道徳心も高く、温かい心の持ち主が多い素晴らしい国だった。しかしハワイは未だテリトリ (TH) と呼ばれた米国の属領だった。このあたりにモロカイ島が選ばれた理由があったのかとも思われる。その後、米国の50番目の州になったハワイは観光事業の一層の振興を図り、オアフ、マウイ、カウアイ、ハワイ

島などが人気を競っているが、モロカイ島がフラの発祥の地とされながらも、リゾート開発が進んだのは1970年代からだっただろう。やはり知る人は皆知っていたのだろう。しかし外者の私には誰も口に出さなかった。

末 利光氏とは、同氏が館長を務める春日居町郷土館・小川正子記念館が2001年に「野口英世・愛と感動の生涯」展を開催した時に訪問して以来、知遇を得ている。その折、全く久しぶりに林 文雄の名も思い出させていただいた。またそこでボランティア活動をしている知性と温かみにあふれた女性の方々の姿にも感動を受けた。この記念館は不治の疫病患者として世間から疎外され、生活の道さえ無くした人たちの治療と、その予防に、当時にしうる全力を尽くし、一生をささげた人たちの記念碑だと感じた。プロミン以前、以後などと区別するが、以後といえども当時の社会情勢では施設をもってその人たちを守る必要があったのではないだろうか。私は長島には行ったことはないが、医学生の時に見学した多磨全生園は、国民の多くがまだ住宅難にあえいでいた当時にあっては、住環境の面だけではうらやましいような所だった。

さて、日本の医学・医療全般に目を向けてみよう。日本の医学の水準は間違いなく世界の上立である。とは言え、米国(主頁)より

で世界中から優秀な学者たちを集めてしまいうメジャーな国だ。生命科学の分野でもノーベル賞級の業績をあげている日本の科学者が今でも少なからず米国で仕事をじている。医学全般の研究業績の面では残念ながら日本は米国には及ばない。しかし、国民全体が享受できる平均的な医療福祉の面では、日本は間違いなく米国を大きく引き離している。米国は今もって「金の切れ目が命の切れ目」と言われている国だ。高額な費用を使って世界最高の医療の恩恵に浴せる一方で、貧困者は最低限必要な治療も満足に受けられない。医療機関や老人保健などで一応の診断や手術は受けられても、薬は処方箋をもらうだけだ。医薬は高価なうえに自費で購入せねばならず、必要な服用を続けられない人が少なくない。嘗ての日本が近代医学の範としたドイツでさえ、医療保険のレベルは日本よりはるかに劣る。それでも日本の医療福祉をもっと良くせよという声は多い。これは人間に寿命がある限り際限の無いことだろう。

戦後の日本は民主主義を押し付けた米国よ



たのかとも思われる。その後、米国の50番目の州になったハワイは観光事業の一層の振興を図り、オアフ、マウイ、カウアイ、ハワイ

り上質の自由と平和の国になった。平和を維持するのには、スイスの例にもあるように国全体がハリネズミと例えられるような防衛努力を必要とするもので、口で不戦を唱えるだけでは守れないというのが世界の常識だ。しかし日本は戦後60年になった今でも国家の防衛に必要な力の多くを米国に依存したままである。また何かあると国家の責任だ、政府が補償すべきだと言う人が多い。その同じ人が増税には断固反対する。いつまでこの俥でいられるのか心もとないが、今のところは世界有数の生活レベルと平和を享受できる国であり、その国民であることを私は幸運なことだと思っている。「ハンセン病国家賠償請求」で一番での国の敗訴を時の首相が控訴せずに受け入れ、賠償金を支払い、今後生活の一切、医療費の一切を保障したことはその顕著な例だ。また平成16年度の国家予算では総額407億円余がハンセン病療養に振り向けられていることもこの本によって始めて知った。

さて、黒川温泉ホテルの事件について私が一番に感じたことは、県庁の担当者が宿泊の申し入れをするときに、もっと詳しく事情を説明して、関係者に協力を依頼しておく「気配り」がなかったのか、ということだ。勿論、断るところもあっただろうが、理解してくれる温泉ホテルが無かったとは断じられない。

さて、日本の医学・医療全般に目を向けてみよう。日本の医学の水準は間違いなく世界の上位にある。とは言え、米国は巨額の資金

これは今、医療の世界で厳しく求められているインフォームドコンセントに似たところがある。たとえ緊急を要する手術の場合でも、また少しなりとも危険を伴う検査の前にも、患者さんや家族の方々にその必要性、有効性、想定される合併症などについて、詳細に説明して同意してもらい、文書にサインしてもらうことが今の医療には求められている。県庁の担当者は温泉ホテルに対して、また結果的に世間の注目に曝されることになる元ハンセン病の方々にも、もっとも「気配り」が必要だったのではなかったか。温泉ホテルの「雇われ支配人」が直前になって判断を間違ってしまった事はあると思う。またもし自身が経営者であつたら別の対応が出来ていたのかも知れない。また「気配り」について言うならば、報道関係の人達は、その温泉ホテルが廃業に追い込まれて多数の失業者を出し、また元患者さんの団体が世間の頻蹙を買ってしまふことまで想定したのだろうか。その報道によって結果的に双方の立場の人達が大きく傷ついてしまった。

NHKのアナウンサーであつた著者は報道の先輩の立場で、その「取材の浅さ」に苦言を呈さざるをえなかったのだろう。「わが自身身を崖の縁に立たせる報道の姿勢」と言うくだりには、私も身が引き締まる思いをさせら

れた。JLMがお送りくださった本書には、読後の感想を寄せて欲しい」旨の、編集担当者の言葉が添えてあつた。読み始めの頃には、現在のハンセン病についての理解が浅い自分には感想文はとて無理だろうと思つていた。しかし読み進むにつれて著者の熱い思いに引き込まれ、読み終った時には書かずにはいられない気持ちになつた。この機にあつてJLMが本書を出版した意義はきわめて大きく、私も多くのことを教えられた。一寸わき道にそれるが、光田健輔が野口英世と同じ濟世学舎の出身であつたことも始めて知つた。

しかし、本書を読むのは今のところでは限られた数の人達にすぎないだろうとも思う。また今、どんなに公正な報道をしても、入所者と同じ世代の人達の意識をすっかり変えることは至難なことだろうとも思う。本書の末尾近くにあるように「全ては寿命待ち」ではないかという「国としての基本姿勢？」の中には、同じ世代の日本人達の寿命も含まれているのではないだろうか。平均余命が長くなつた現在では、未だ20年前後の歳月が必要かも知れない。それまではJLMの人達は有識者をも誘い合わせて、その中に少数者も、やがては多数の元患者さんを加えてゆく温泉旅行を企画するなどして、地道に世間の人達の意識を正しくしていくという、体を張つ

た運動をするのも一案ではないかと思う。  
 私が医師として2年間を過ごしたのに、モロカイ島の施設のことについては全く知らず  
 に済んでしまったことは、単に私が不勉強だ  
 ったからか。当時のハワイの人々の心の中は  
 どうだったのか、などと今さらながら考えさ  
 せられてしまう。それについても、48年前  
 にモロカイ島からアロハウイクのパレード  
 に参加した、若く美しいフラダンサー達を太  
 きな歓声と拍手で迎えた人々(当時はまだ日  
 本の観光客はいなかった)の喜びに満ちた顔  
 と、1年ほど前に日本で起きたハンセン病

「ハンセン病報道は真実を伝え得たか」を読んで

あせび会(稀少難病者の会) 会長 佐藤 エミ子

拝啓

3月も半ばとなり、ようやく春の息吹を感じ  
 じる頃となりました。私はJLMの購読者で  
 末館長さんの連載は拝読させて頂いておりま  
 した。この度、改めて上記出版物を拝読いた  
 しました。裁判闘争以来、私は一方的なマス  
 コミ報道にうんざりし、ハンセンと書かれた  
 記事もテレビも観るのが嫌になり、目を遠ざ  
 けておりました。  
 ハンセンの患者さんを利用しようと、し

にまつわる事件と報道との間に大きな落差を  
 感じざるをえない。今はこの本に出会えた事  
 を感謝している。  
 (2005年2月)



た組織の人々が許せないのです。それを知り  
 ながら人気取りをやった小泉総理と、行政に  
 すっかり不審を持ち、何もかも信じるに足る  
 ものがない社会に絶望しておりました。よう  
 やく巡り会えたこの一冊で、長い間の心のつ  
 かえがございました。  
 私は1970年から「難病患者」の相談窓  
 口として活動しております。「あせび会」はそ  
 の中でも遺伝性疾患と云われ、今なお偏見の  
 中で暮らす人々や、数が少なく医学研究の対

象にもならない病気の患者とその家族の集ま  
 りです。なかにはハンセンの人達が羨ましい  
 という人もいる程です。およそ20年前からハ  
 ンセン療養所の開放を叫び、10年前に著書の  
 最後の章「コロニーの先住民民族」構想を夢み  
 て、静岡の神山復生病院の敷地の一部(修道  
 女会より寄贈)に「難病患者と家族の保養施  
 設」「御殿場荘」を整備したり、少人数の住ま  
 いも作り、今も運営いたしております。

予防法の改正やハンセン病の社会啓蒙にも  
 30年前から携わりました。全生園にも何度か  
 伺いました。記念館作りにも協力しました。  
 菊池恵楓園にも2度伺いました。

だが、全療協の人々の差別を武器に闘う姿  
 勢に好感が持てませんでした。同時に日本で  
 一番手厚く保護されている元患者の皆さんと、  
 私の所に集まる患者の経済的差は余りにも大  
 きく、共生することはできませんでした。働  
 かなかとも暮らせる皆さんだから、国を相手  
 に闘うことができ、それが生き甲斐にもなっ  
 ていると感じたこともあります。一部のハン  
 セン病元患者さんにとっては「差別」「偏見」  
 「強制隔離」こそ金科玉条なのだと思います。  
 りました。

また、ハンセン病の啓発文の中に「私達は  
 遺伝病ではありません」というくだりがあり  
 ます。私のところは会員の90%が遺伝性疾患

コミ報道にうんざりし、ハンセンと書かれた記事もテレビも観るのが嫌になり、目を遠ざけておりました。

ハンセンの患者さんを利用しようとし、し

でも、いま現在プロミンが出る前のハンセン病の方々とおなじような症状に苦しみ、親戚身内から排除され、冷たい社会の目の中で孤独に生きていく人がいます。ハンセンも難病も厚労省の窓口は同じでした。ハンセンの国家賠償とその後の整備に膨大な費用をつかうことから、難病の治療研究予算は削減されるばかりです。とても悲しく思っています。そんな中で、瀬戸内に打ち上げられた虚無の花火、生前に建てた立派な墓標を見ると、正義の虚しさを感じるばかりです。国家賠償が国民の税金だということをもっと報道してほしいと云いたくなります。

たいへん長い文章になり失礼いたしました。勝手に自分の代弁者がいたような錯覚を持ち、心のつかえがとれたものですから。お許し下さいませ。

(2005年3月) 敬具

### ハンセン病訴訟・原告数の解析

(ハンセン病資料館十周年記念誌より)

	A 入所者数 01.5.1現在 人	B 判決前原告 5.11現在 人	C B/A %	D 控訴断念前増加 5.12-21分 人	E B+D 人	F B+D/E %	G 5.22 以降増 人
松丘保養園	240	4	1.7	29	33	13.8	8
東北新生園	218	0	0	4	4	1.8	11
栗生楽泉園	290	26	9.0	44	70	24.1	48
多磨全生園	511	68	13.3	149	215	42.1	68
駿河療養園	184	13	7.1	75	88	47.8	45
長島愛生園	551	68	12.3	35	103	18.7	21
邑久光明園	332	17	5.1	102	119	35.8	19
大島青松園	229	100	43.7	77	177	77.3	2
菊池恵楓園	684	46	6.7	99	145	21.2	31
星塚敬愛園	414	42	10.1	54	96	23.2	35
奄美和光園	102	24	23.5	42	66	64.7	9
沖縄愛楽園	444	174	39.2	103	277	62.4	104
宮古南静園	178	32	18.2	70	102	58.0	16
合計	4,375	614	14.0	881	1,496	34.2	413

私は1970年から「難病患者」の相談窓口として活動しております。「あせび会」はそ

「強帯隔離」こそ金科玉条なのだと思っております。また、ハンセン病の啓発文の中に「私達は遺伝病ではありません」というくだりがあります。私のところは会員の90%が遺伝性疾患

Aは二〇〇一年五月一日現在のハンセン病療養所の入所者数です。

Bは熊本裁判の判決時、五月一日に療養所の入所者のうちで、原告になっていた人の数です。

CはB原告数の入所者に対する比率です。

Dは五月一日に原告が勝訴してから、政府が控訴を断念する五月二三日までに増加した原告数です。この間に全国の療養所の入所者に、熱心に原告になるようにと、原告や弁護士が勧誘したことは周知のことです。

E || B + Dは政府が控訴を断念した時の入所者の中の原告数です。

FはEの原告数のA入所者数に対する比率です。この時はまだ裁判に勝った原告にのみ「賠償金」がもらえるのであって、全ての入所者に平等に「補償金」が支払われることは明らかになっていなかった時です。ですから原告になった比率三四・二%を一〇〇から引いた六五・八%の人は、「賠償金」がもらえないことを承知の上で、なお原告にならなかった人と言えます。この人たちが入所者の三分の二もいらしたとは。



### 冬の夜

原 毅

限りない  
広がり の 中で・・・  
冬の 夜が  
更ける。

○ ○  
星の 美しさよ。  
その またたき よ。

### あとがき

▽ 我が国が世界に誇る医学者の小柴健先生から素晴らしい玉稿をいただきました。私たちが人と人とのかわりの中で生きていく時、最も大切なものは・・・。特定の考えにとらわれた先入観を持つことなく、透徹した確かな眼をもって事実を見つめ、把握する、柔軟な発想と頭脳活動です。せめて人の偉大さと共鳴できる感性を持ちたいと願います。

▽ あせび会という遺伝性の難病の方とその家族の会の佐藤会長から、身のひきしまるお便りをいただきました。ハンセンによる病原菌の発見による伝染病であることの啓蒙、プロミン以降の治る病気の宣伝、長い年月にわたる差別・偏見からの脱却とはいえ、私どものその歩みが熱心であればあるほど、遺伝す

る病気と、治す手段をもたない病とかわる方々を、鞭打っていたのではないのでしょうか。原告数の解析でいろいろのことが見えて来ます。一つの考え方だけに偏向した報道だけがなされ、たとえその考え方からは気になれないとしても、多数の意志を無視することは、究極的に偏見、差別を冗長するだけで、事態の解決には何の足しにもならないと存じます。

▽ もうすぐイースターを迎えます。世の変化が速くなっても、変わらないイエス様の愛の原点に堅く立ちたいと考えます。(伊)

《発行所》156-0057 東京都世田谷区上北沢3-8-19

社団法人 Japan Leprosy Mission (JLM)

理事長 嶋崎 紀代子

編集発行責任者 伊藤 秀朗

《事務室》156-0057 世田谷区上北沢3-8-14松沢教会

電話(教会) (03)3304-5900 FAX(03)3303-4543

(伊藤自宅) (03)3302-3007

※振替・00150-1-71219 JLM

※銀行・みずほ銀行新宿支店 普通預金216517

頒価 1部 100円・年額 1,000円

地域のニュース

長島愛生園の元患者18人

ハンセン病医療に尽くした医師

「小川正子さん墓参で来県」

ハンセン病療養所の国で初めてのハンセン病患者が、30歳だった小川さん立療養所長島愛生園(岡者療養所として設置され、小川さんは33年から8年間、医師として働いた。ハンセン病は当時、「不治の伝染病」と誤り、激務の中で治療を続けた認識を持たれていた。

「感謝の気持ち伝えたい」



小川正子さん(笛吹市教委提供)

一行は18日に小川さんの墓を訪れ、お世話になった感謝の気持ちを伝える。同園は1930年に国



笛吹市民と交流し詩吟や民謡で歓迎を受けた長島愛生園のハンセン病元患者たち

春日居町の住民と交流 きょうお参り

これまでも墓参を望む元患者はいたが、団体で墓参りするのは今回が初めて。34年に8歳で北海道から入園し、小川さんを知る中村キミコさん(78)は「しっかりして、あこがれの先生だったと記憶している。先生のことを忘れることができず、どうしても墓参りをしたかった」という。

元患者たちは同日、市社会福祉協議会春日居支所で茶会や武田節の民謡で歓迎を受けた。小川さんの遺品などが展示されている春日居郷土資料館(小川正子記念館)でボランティアをしている中村しづゑさんは「正子先生は本当に喜んでいらっしゃると思う。お墓でゆっくり対話して下さりたい」と話した。

【中村有花】

医療と経営分業盛る

提言書を市長に提出

甲府市立甲府病院(甲府市増坪町、赤羽賢治院長)の経営健全化を協議してきた「市立甲府病院

会長は17日、提言書をまとめた。宮島市長は「民間の経営責任者を招くことも視野に入れ、できる

改善を目指す。同病院は99年5月に現在地に新築移転した時の

業化や医薬品などの購入ことから着手したい」と

借金返済や周辺医療機関

年度の収支は7億8700万円の赤字。累積欠損金は約17億9000万円に上る。

提言されたのは、赤羽院長が医療と経営の両方の責任者となっているため、経営に関しては他に経営のトップを置く、医薬品、診療材料などを

県立宝石

# カリキュラム見直しへ

県は県立宝石美術専門学校のカリキュラム見直しに向け、本格的な検討に着手した。学生などを対象にしたアンケート調査や宝飾業界からの要望を踏まえ、カリキュラムに業界関係者の授業を取り入れたり、基礎的教育を充実させることなどを検討している。早ければ二〇〇七年度から導入する方針。

アンケート調査は今年一月に行い、在校生と卒業生計百五十四人、宝飾関係企業五十四社が回答。在校生からは、入学後の学科(宝石・宝石・貴金の属加工・宝飾デザイン)選択で、希望学科に進めな

県は県立宝石美術専門学校のカリキュラム見直しに向け、本格的な検討に着手した。学生などを対象にしたアンケート調査や宝飾業界からの要望を踏まえ、カリキュラムに業界関係者の授業を取り入れたり、基礎的教育を充実させることなどを検討している。早ければ二〇〇七年度から導入する方針。

## 教員採用20人減、177人

来年度 県教委 少子化影響見込

県教委は十八日、公立学校の二〇〇六年度採用教員の試験要項を発表し、採用予定者は百七十六人、中学校が四十五人、高校が四人、高校が四人、高等が四人、特殊教育学校も程度。〇

## 小川正子墓前で「感謝」



小川 正子

と訪れたものをして手を合わせた。墓前で、元患者が石をさすって感謝の気持ちを表す元患者の姿も見られた。

岡山県瀬戸内市のハンセン病療養所「国立療養所長島愛生園」で暮らすハンセン病元患者十八人が十八日、同園で女医として患者の救済に尽くした笛吹市春日居町出身の小川正子(一九〇二―四三)の墓参りをした。「感謝の気持ちを伝えたい」

## ハンセン病元患者が来県



小川正子の墓参りをするハンセン病の元患者 二 笛吹・仏念寺

## 笛吹市 18人が遺徳しのぶ

春日居町 18人が遺徳しのぶ 元患者らは、同市春日居町桑戸の仏念寺にある正子の墓前を訪れ、献花

山梨メセナ協会 〆 山梨メセナ協会 〆 山梨メセナ協会 〆



# ハンセン病救済恩忘れず

岡山県瀬戸内市の国立ハンセン病療養所「長島愛生園」の元患者たちが18日、同園で医師として救済に尽くした小川正子(92歳)の出身地である笛吹市春日居町を訪れ、初めての墓参りをした。ハンセン病患者の施設への隔離を定めた「らい予防法」が96年に廃止されて以降、熱心に入所を勧誘して回った小川は「あやまった国策の推進者」と見られることがある。小川にゆかりのある元患者らは「夙くしてくれた恩を忘れず、世間の誤解を解いていかなければならない」と墓前で手を合わせた。

## 笛吹で岡山「愛生園」元患者ら

### 小川正子の墓

### 手合わせ感謝

訪れたのは、80代を中心とする元患者19人。発起人の多田芳輔さん(80)によると、同市の小川正子記念館の末利光館長が今春に出版した「ハンセン病報道は真実を伝え得たか」を読んで、小川の生涯を見直したのが訪問のきっかけ。愛生園に暮らす約50人のうち、都合のついた人たちが計画し、17日午後バスで到着した。一行はこの日、小川正子記念館を見学したあとで、小川が眠る仏念寺を訪ねた。墓前で元患者たちは、お経を唱和しながら、一人ひとり焼香して手を合わせた。

キミコさん(77)は「小川先生は、幼いころ母親のように世話をしてくれ、私たちもまわりをいつも取り囲んだ。自由に外出できる世の中になったことを先生に知ってもらいたかった」と感激した様子も満ちていることと

訪問を受け入れた末館長は「高齢の元患者が多く、これだけの規模での墓参りは最初で最後ではないか。小川が一番お参りしてほしい人たちで、本

思」と話した。小川は東京女子医専(現在の東京女子医大)を卒業後の32年から、愛生園に勤務。結核をわずらって出身地に戻るまでの7年間を過ごした。

教委は「力などを率が高く平均点と分析。科について教員(来春)県教委用の県公検査(教要項を登載の採用予中、高校

### 5教科平均262点

県教委は18日、今春の公立高校入試の成績結果を発表した。総合科目(5教科500点満点)の平均は262点と、過去5年間で最低だった前年度をさらに2.4点下回った。また男女別では、男子が262.7点、女子が261.2点と、今年度は男子が女子

を抜いた。同課は「特に、社会科の平均が50点以下に落ちたのが大きな要因」としている。県教委高校教育課によると、教科別の平均点は国語59.6点(前年度54点)、社会49.6点(同56点)、数学44.9点(同45.3点)、理科52.7点(同52.3点)、

英語55.2点(同56.9点)と、英社数3教科で前年を下回った。また、総合得点の最高は458点、最低は42点だった。県

## 経営改善へ目標値

### 甲府市立病院協議会が提言 事業計画など4項目

「市立甲府病院経営協議会」(会長・布能寿英くろがねや会長)はこのほど、同病院の経営改善への提言をまとめた。病院側は提言を受け、今後の事業計画に反映させて

の事業計画の策定②医業と経営の分離③市民・地域との協働・連携の強化④病院職員の意識改革の4点を柱としている。事業計画では、黒字収

入院・外来患者数などに具体的目標値を設定。週・月・年度単位で達成度をはかるよう提言した。病院長が医業と経営の両方の現場責任者となっている現状を改め、経営に関する責任者と専任の組織を置くことも提案。同時に人間ドック導入や診療時間の延長などにより、集客力を強化するな



老人施設訪れ  
ランなど贈る  
プリンセス天功さん  
マジシャンのプリンセス天功さんが18日、市来養護老人ホームなど2カ所を訪問した。天功さんは小野修一市長と親交があることから市が要請したという。天功さんは02・03年にヴァンフォー、ームスボ、この日、井町南下を「ム」静、さんは三、さん生活、とあいさ、やオリ、をプレゼン、た後、入



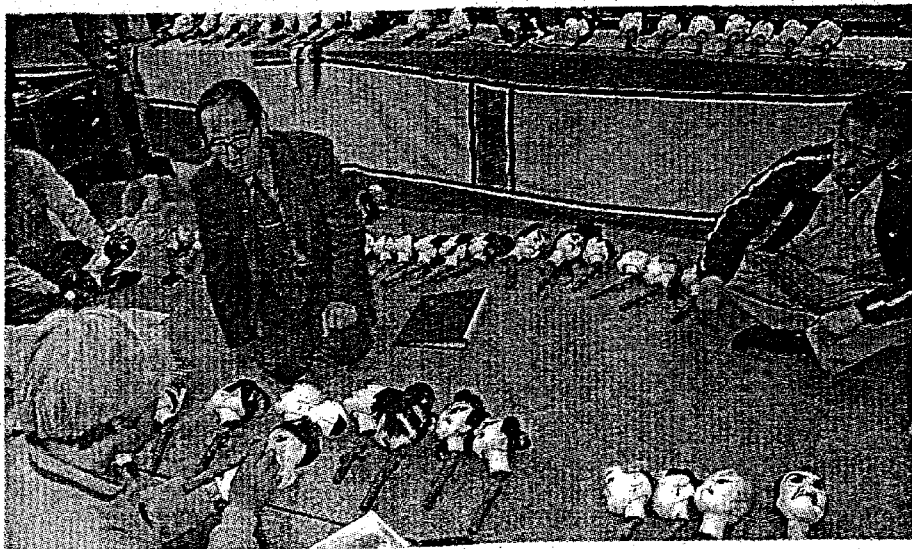
# 大月の笹子追分人形60体調査

## 頭制作年代 3体は350年前

### 10体、遠く淡路の特徴

大月市笹子町追分に江戸時代から伝わる「笹子追分人形芝居」(県無形民俗文化財)の人形の頭、頭制作年代などを記録に残そうと、「大月の伝統芸能を育む会」(小高高光代表)が専門家に依頼した初の調査が18日まで行われた。所有者の天野宗光さん(73)が自宅の保存庫で管理する60体の頭が一堂に並べられたのは珍しいという。調査では、祝言で舞う三番叟さんぱんそうの頭など3体が350年ほど前の人形浄瑠璃全盛期に作られたことが確認された。

⑤調査で350年ほど前の作と確認された三番叟の頭⑥一堂に並べられた笹子追分人形の頭60体の寸法を測定する加納所長(手前)と、調査を見つめる天野新一さん(右) 川いずれも大月市笹子町で



「育む会」は大月の伝

「育む会」は大月の伝統芸能の保存と継承を目的に2年前に市民有志が結成。人形を操る座長の宗光さんや一座のメンバーが高齢化し、公演を10年間中止

していたが、昨年、長男の新一さん(48)が座長を引き継ぐため東京から帰り、育む会の支援で秋に公演が復活した。これを機に、市教委の補助で、過去に県内の人形座を調べた人形芸能史研究所(名古屋)の加納克己所長に人形調査を頼んだ。

笹子追分人形芝居は、義太夫節の伴奏で3人が一つの人形を操る。江戸中期に淡路の人形芝居が伝わったとされるが、伝来ははっきりしない。地域で受け継がれたが明治期に廃れ、2度の大水害で衣装などが流失した。

この危機を救った「中興の祖」が宗光さんの3代前の当主で、明治期に私財を投じて近隣各地の人形を集め、東京の人形遣いから操り方を習い、一座を興した。

頭を測定した加納所長によると、頭の彫りの特徴

「これを機に、市教委の補助で、過去に県内の人形座を調べた人形芸能史研究所(名古屋)の加納克己所長に人形調査を頼んだ。笹子追分人形芝居は、義太夫節の伴奏で3人が一つの人形を操る。江戸中期に淡路の人形芝居が伝わったとされるが、伝来ははっきりしない。地域で受け継がれたが明治期に廃れ、2度の大水害で衣装などが流失した。この危機を救った「中興の祖」が宗光さんの3代前の当主で、明治期に私財を投じて近隣各地の人形を集め、東京の人形遣いから操り方を習い、一座を興した。頭を測定した加納所長によると、頭の彫りの特徴



甲府総局  
〒400-0032  
甲府市中央1-12-38  
☎ 055-235-7000  
fax 055-237-4469  
社通 ☎ 0555-23-0353  
大月 ☎ 0554-22-0227  
南アルプス ☎ 055-284-7210

購読・配達のご用は  
☎ 0120-12-0843  
平日 7:00~21:00  
休日 7:00~17:00

広告のご用は  
☎ 055-228-5100

甲府市中央三丁目バス停北五〇m  
**矢崎耳鼻科**  
TEL 233-3387

きょうの天気  
6-12時 降水確率 12-18時

0	甲府	0	河口湖
0	大月	0	北西
0	大月	0	南
0	大月	0	南

甲府 大月 西北西 西南 河口湖 南部